Tsukuba Psychological Research
2007, **34**, 17-26

異性関係スキル研究の動向と問題

筑波大学大学院(博)人間総合科学研究科　相羽　美幸

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系　松井　　豊

A literature review of heterosocial skills research

Miyuki Aiba (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Doctoral Program in Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)
Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This paper presents an overview of psychological research into heterosocial skills and discusses future issues. While studies of heterosocial skills increased rapidly from 1975, they decreased from the 1990s. About half of the studies considered males and college student participants, focusing on assessment. Behavioral measurements such as role-play tests and self-report measurements were employed as the principal procedures to measure heterosocial skills. The self-report measurements rated interaction competence or anxiety in heterosocial situations. We highlight four issues with the previous studies into heterosocial skills. First, few studies have dealt with the skills related to the maintenance and breakup of relationships. Second, previous studies have focused primarily on individuals experiencing anxiety or difficulty in general heterosocial situations. Third, previous studies fail to distinguish romantic relationships from heterosocial friendships. Finally, because the problematic situations and skills considered in previous studies may not apply to Japan due to cultural differences, future research will need to identify problematic situations and skills that are culturally relevant to Japan.

Key words: heterosocial skills, relationships with the opposite sex, romantic relationships

本研究では，異性関係スキル（heterosocial skill）に関する心理学的研究の動向を概観し，今後の課題を論じる。まず，異性関係スキル研究の動向について紹介し，異性関係スキルの定義や捉え方について議論する。次に，異性関係スキルの測定に関する研究を紹介し，最後に，以上の議論をふまえ，異性関係スキル研究についての今後の課題を検討する。

1．異性関係スキル研究の動向

まず，異性関係スキル研究の全体的動向について概観する。

Nangle & Hansen（1998）は，1970年から1994年に Journal of Consulting and Clinical Psychology, Behavior Therapy, Behavior Modification において，異性関係スキルについて発表された32件の論文を調査した。その結果，異性関係スキルの研究数は，1970年代の後半に急増し，その後徐々に減少していることが明らかになった。また，Nangle & Hansen（1998）は，32件の論文における研究対象の70％以上が男性であり，85％以上が大学生であること，研究内容として60％以上が異性不安に焦点をあてていること，研究目的として75％以上が治療よりもアセスメントに焦点をあてていること，研究方法として80％以上がロールプレイアセスメントを使用していることを，明らかにしている。

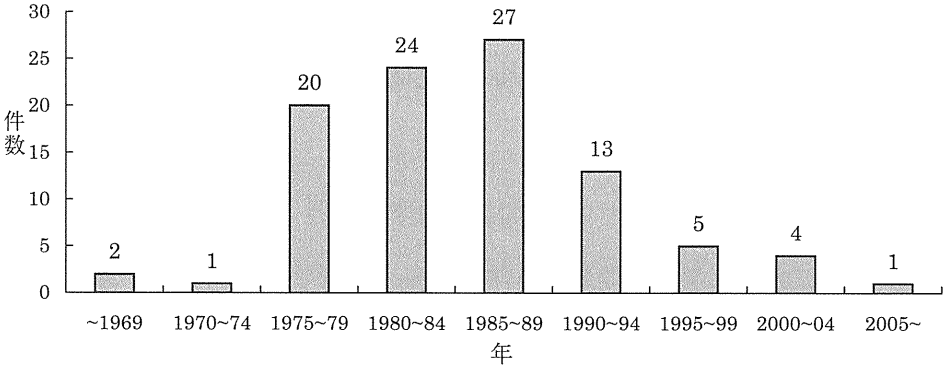

Fig. 1　異性関係スキルの文献数（英語）

Nangle & Hansen（1998）をふまえ，本研究では検索対象雑誌を広げ，1994年以降の文献を調査対象に加えて異性関係スキル研究の動向を整理する。具体的には，PsycINFOと国立国会図書館の雑誌記事索引検索のデータを使用して，異性関係スキルに関する文献数を確認した。PsycINFOでは，1806年以降の英語，日本語の各文献の中で，キーワードに“heterosocial”または“dating skill”を含む文献を検索した。その結果，英語では119件，日本語では1件の文献が見出された。雑誌記事索引検索では，1969年以降の文献の中で，論題名に“異性関係スキル”を含む記事を検索した。その結果，1件の文献が見出された。PsycINFOで検索された英語の119件の文献のうち，異性関係スキルとは内容の異なる文献を除外し，レビュー論文（Nangle & Hansen, 1998）において紹介されていたが検索されなかった文献を補足した。その結果，異性関係スキルに関する英語の総文献数は97件，日本語の総文献数は2件となった。

異性関係スキルに関する英語文献を発表年次別に整理すると，文献数は1975年以降に急増したが，1990年代から減少していた（Fig. 1）。一方，日本語の文献は，1994年と2005年とに1件ずつ発表されたのみであった。

英語文献の研究内容について分析した結果（Fig. 2～4），研究対象の約50%が男性であり，60%が大学生であること，研究目的の約50%が治療よりも自己評定尺度の作成やロールプレイテストにおける行動測定といったアセスメントに焦点があてられていた。この結果は，Nangle & Hansen（1998）の調査結果と同様の傾向であったが，女性や大学生以外の対象者が増え，アセスメント以外を目的とする研究も増えていた。

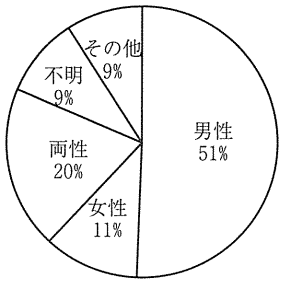

Fig. 2　研究対象者の性別

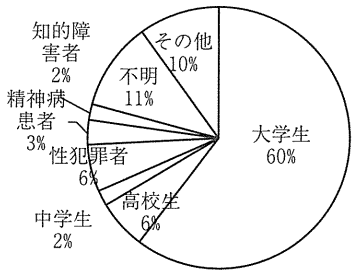

Fig. 3　研究対象者の属性

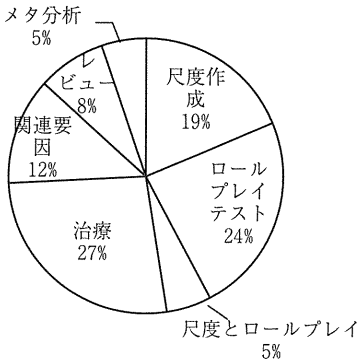

Fig. 4　研究目的

2．異性関係スキルの定義や捉え方

これまで，異性関係スキルの捉え方は研究者によって異なり，様々な異性関係スキルの定義が提出されてきた（Grover, Nangle & Zeff, 2005）。そのため，現時点では異性関係スキルに関して統一された定義は存在していない。例えば，Barlow, Abel, Blanchard, Bristow & Young（1977）は，異性関係スキルを“異性との関わりにおいて必要となる社会的スキル”と捉え，異性関係スキルには3つの側面があると指摘している。第1は，異性との関係を開始するために必要な一連の社会的行動，第2は，性的行動に繋がる社会的・対人的行動，第3は，異性関係の維持において必要となる行動である。Galassi & Galassi（1979）は，Barlow et al.（1977）の指摘をもとに，異性関係スキルを“異性との社会的・性的関係を構築し，維持し，終結するために必要な行動”と定義している。

Nangle & Hansen（1998）は，異性関係スキルを“異性との社会的相互作用全体でのやりとりに要求される社会的スキル”と定義し，異性関係スキルを社会的スキルの下位概念と位置づけている。

一方，Grover et al.（2005）は，異性関係スキルを，一般的な社会的スキルと関連があるが，社会的スキルとは異なるスキルであると捉えている。そして，異性不安と異性関係スキルと社会的スキルとの関連を調査した結果，異性不安と異性関係スキルには相関が見られるが異性不安と社会的スキルには相関が見られなかったことから，異性関係スキルと社会的スキルを区別する要因は，異性との交互作用で生じる不安をうまく対処する能力であることを示唆している。また，Chee & Conger（1989）は，友人関係コンピテンスと異性関係コンピテンスとの関係を調査している。同研究では，ビデオ撮影されたサクラと実験参加者との会話をもとに，評価者が行動スキルとコンピテンスをそれぞれ評価した結果，発話時間と神経質なしぐさは友人関係コンピテンスの評価と強い関連が見られ，発話時間と視線は異性関係コンピテンスの評価と強い関連が見られた。また，男性の場合，コンピテンスの評価は，同性との相互作用状況と異性との相互作用状況との間で一貫していた。したがって，社会的スキルと異性関係スキルは異なる行動スキルによって構成されているが，男性においては，社会的スキルと異性関係スキルは類似していることが示唆された。

以上より，研究者による異性関係スキルの捉え方には以下の点において混乱が見られる。

第1に，異性関係スキルを社会的スキルの下位概念と捉えるか（Barlow et al., 1977; Nangle & Hansen, 1998），異なる概念であると捉えるか（Grover et al., 2005）といったように社会的スキルとの概念関係が多様であることである。

第2に，異性関係スキルを行動と捉えるか（Barlow et al., 1977; Galassi & Galassi, 1979），能力と捉えるか（Grover et al., 2005）といったように概念の広さが一定でないことである。

3．異性関係スキルの測定

異性関係スキル研究の動向において述べたように，日本では異性関係スキル研究が非常に少ない。そのため，日本において異性関係スキルを研究するためには，異性関係スキル研究の中で最も多く研究されている測定（アセスメント）方法について吟味する必要がある。

そこで本節では，異性関係スキルの測定方法としてよく用いられているロールプレイテストにおける行動測定と自己評定尺度について，代表的な研究を紹介する。

次に，多くの自己評定尺度では，いくつかの問題状況を提示し，その状況に対する行動を尋ねる形式でスキルを測定しているが，この問題状況には文化規定性があると考えられる。そこで，自己評定尺度で扱われてきた問題状況について詳しく紹介し，欧米の研究で測定されてきた問題状況が日本において適用可能であるかについて検討する。

さらに，各尺度間の関連について検討した研究を紹介したのち，異性関係スキルと関連する要因の1つとして，身体的魅力をとりあげ，異性関係スキルと身体的魅力との関連について研究知見を紹介する。

3－1．ロールプレイテストにおける行動測定

欧米では，デート不安（date anxiety）や異性不安（heterosocial anxiety）などの原因の一つとして，異性関係スキルの不足が指摘され，主に行動療法の視点から研究が行われてきた。これらの研究では，デート不安や異性不安の高い青年を対象として，異性との相互作用に必要な行動スキルを改善することを目的としている。異性関係スキルの高群と低群に群分けされた実験参加者に対して，録音刺激やサクラを用いたロールプレイテストを行い，異性関係スキルの高群が多く行った行動スキルを，異性との相互作用における望ましい行動スキルとして特定している。

例えば，Rehm & Marston（1968）は，異性不安

を測定する7項目の行動指標（the Situation Test）を作成し，異性不安の高群と低群を対象に，録音刺激に対する反応を録音して分析を行った。その結果，不安の他者評定，反応時間，不安のサインの数（どもり，単語や文の繰り返しなど）が，異性不安の高群のほうが低群よりも多かった。

Barlow et al.（1977）は，異性関係の開始に必要な行動を測定する17項目のチェックリスト（Heterosocial Skills Behavior Checklist）を作成し（Table 1），デート頻度の高群と低群を対象に，異性のサクラとの会話をビデオ撮影により観察した。訓練された評価者2名がチェックリストに基づき，録画されたビデオに映された実験参加者の行動が適切か不適切かを評価した。その結果，会話の形式と感情において，デート頻度の高群のほうが低群よりも行動の適切性が高いことが明らかになった。

Conger & Farrell（1981）は，異性関係スキルを測定する8項目の行動指標（Behavioral Components of Heterosocial Skills）を作成し，デート頻度の高群・中群・低群を対象に，異性のサクラとの会話をビデオ撮影により観察した。その結果，実験参加者の発話時間と注視の持続時間，サクラの発話時間のそれぞれが長いほど，不安が少なく，異性関係スキルが高かった。

これらの研究結果をまとめると，Rehm & Marston（1968）では不安の他者評定と反応時間と不安のサインの数が，Barlow et al.（1977）では会話の形式と感情が，Conger & Farrell（1981）では実験参加者の発話時間と注視の持続時間とサクラの発話時間が，それぞれ異性関係スキルの行動指標として提出されており，どのような行動が異性関係スキルとして適切であるかについて統一的な見解が得られていない。

このように，ロールプレイテストにおける行動測定の諸研究間で，異性関係スキルの行動指標として提出されている行動スキルが異なっている理由として，Conger & Farrell（1981）は次の4点を指摘している。第1に，録音やビデオ撮影など，観察方法が研究によって異なる点である。第2に，観察される行動が異なる点である。第3に，異性不安やデート頻度など，実験参加者の群分けの設定基準が異なる点，第4に行動が適切か不適切かを判断する検出基準（その行動の秒数や回数）が異なる点である。

3－2．自己評定尺度

行動スキルに関する研究の進展とともに，質問紙調査において異性関係スキルを測定する自己評定尺度も開発されてきた。質問紙調査研究の目的は，主に，自己評定尺度によって異性関係スキルの高低を比較して，実験協力者や治療対象者の群分けや，実験前後でのスキル評価や治療効果の測定を行うことである（Hansen, Christopher & Nangle, 1992）。異性関係スキルの自己評定尺度は，異性関係における相互作用能力を測定する尺度と異性関係における不安や否定的感情を測定する尺度とに大別される。

（1）相互作用能力を測定する尺度

相互作用能力を測定する尺度としては，SAQ（Christensen & Arkowitz, 1974），SHI（Twentyman & McFall, 1975），DAQ（Levenson & Gottman, 1978），MAHC（Grover et al., 2005），DATE 2（堀毛，1994），異性からの社会的スキル尺度（豊田，2005）などがあげられる。

SAQ（the Social Activity Questionnaire）は，デート頻度と現在のデート頻度に対する満足度と相互作用能力を測定する7項目から構成されている。Christensen & Arkowitz（1974）は，SAQを用いて治療効果の測定を行った。男女ペアの参加者が，週に一度6週間練習でデートし，デートの後にお互い

Table 1　Heterosocial Skills Behavior Checklistの例

カテゴリー	行動	適切	不適切
声	大きさ	はっきりと聞こえる大きさ	ささやき声
	速さ	相手よりゆっくり	相手より速い
	抑揚	比較的一定	抑揚が多く変わりやすい
会話の形式	開始	新しい話題を提供する	話を始められない
	適切な対応	相手の発話に少なくとも一度反応する	相手の発話に反応できない
	流れ	会話の合間の沈黙（5秒以上）を作らない	会話が途切れる
感情	表情	状況や相手の表現に応じた表情をする	状況や相手の表現にそぐわない表情をする
	アイコンタクト	相手が話している時，30秒間に5秒以上相手の顔を見る	相手が話している時，30秒間に5秒以上相手の顔を見ない

フィードバックをするというデート練習を行った結果，異性不安の自己報告が低減し，治療後のSAQの得点が向上した。

SHI（the Survey of Heterosocial Interactions）は，デート頻度に関する4項目と異性関係状況における相互作用能力を測定する20項目から構成されており，異性をデートに誘う，初対面の異性に話しかける，といった問題状況が扱われている。Twentyman & McFall（1975）は，治療対象となる男子大学生をSHIの得点に基づいてトレーニング群と統制群とに群分けし，トレーニング群にのみスキルトレーニングを行った。トレーニング内容は，トレーニングする異性との状況が提示された後，対象者はモデリングテープを聴き，どのように反応すべきかを練習する。次に，提示された状況で女性のサクラと実際にロールプレイをしてどの程度満足する反応ができたかを自己評定する。トレーニング群と統制群を比較した結果，トレーニング群のほうが統制群よりも，不安が低くなり，SHIの得点が向上した。

DAQ（the Dating and Assertion Questionnaire）は主張性場面とデート場面での相互作用能力を測定する18項目から構成されており，デート場面では，異性と長時間話す，デートに誘う，といった問題状況が扱われている。

MAHC（the Measure of Adolescent Heterosocial Competence）は，Grover & Nangle（2003）で得られた問題状況における異性関係コンピテンスを測定する40項目から構成されており，デートや性的状況などの問題状況が扱われている。

DATE 2（異性関係スキル尺度）は，日本の大学生を対象にデート場面での行動を自由記述形式で調査した堀毛（1989）をもとに作成されたデート場面での異性関係スキルを測定する20項目から構成されている。

異性からの社会的スキル尺度は，中村（1991）と堀毛（1989）をもとに作成された異性からの好意を得るためのスキルを測定する20項目から構成されている。

SHI，DATE2，異性からの社会的スキル尺度の項目例をTable 2に，MAHCの質問項目と選択肢の例をTable 3に示す。

（2）異性不安や否定的感情を測定する尺度

異性不安や否定的感情を測定する尺度としては，SQ（Rehm & Marston, 1968），SAD（Watson & Friend, 1969），DAS（Calvert, Moore & Jensen, 1987）などがあげられる（Table 4）。

SQ（the Situation Questionnaire）は，異性関係状況において不安に感じる程度を測定する30項目から構成されており，異性に電話する，異性とダンスする，といった問題状況が扱われている。Rehm & Marston（1968）は，男子大学生を自己強化群と統制群とに分類し，自己強化群に対して，認知変容手続きを行った。具体的には，異性との問題状況を階層化し，それぞれの状況における行動をポイント制で得点化し，徐々に階層を上げていくという手続きをとった。その結果，自己強化群のSQの得点と，反応ごとの単語数が統制群よりも改善された。

SAD（the Social Anxiety and Distress scale）は，見知らぬ他者や異性との相互作用における社会的回

Table 2　SHI，DATE2，異性からの社会的スキル尺度の項目例

尺度	質問項目の例	回答選択肢
SHI（Twentyman & McFall, 1975）	過去4週間でデートした回数	直接回答
	あなたはダンスパーティーでとても魅力的な見知らぬ女性に会いました。彼女は1人で立っています。あなたは彼女とダンスしたいと思っています。あなたならどうしますか？	「絶対に誘えない」～「どんな場合も誘える」の7件法
	あなたは大学で授業を受けています。授業の後，知り合いの女性に会いました。あなたは彼女と話したいと思っていますが，彼女はあなたの知らない女性2人と一緒に歩いています。あなたならどうしますか？	「絶対に話しかけられない」～「どんな場合も話しかけられる」の7件法
DATE2（堀毛，1994）	相手の好みにあうような服装や髪型をする	5件法（選択肢は掲載なし）
	さりげなくキスする	
	あまり緊張せずリラックスしながらつきあう	
	別れぎわにはできるだけムードをもりあげる	
異性からの社会的スキル尺度（豊田，2005）	日常的なことをおもしろく表現できる	「非常にあてはまる」～「あまりあてはまらない」の4件法
	異性との会話では自分がしゃべる方が多い	
	異性に話しかけるときには勇気がいる	
	異性をすぐ好きになる	

Table 3　MAHCの質問項目と選択肢の例

あなたには数週間片思いしている異性がいます。あなたは，彼女（彼）があなたのことを好きかどうか知りたいと思っています。あなたならどうしますか？	
選択肢	（3）たくさん電話して，好きになってもらおうとする
	（1）何もしない
	（2）彼女（彼）があなたのことを何と言っているか，友達に聞く
	（4）あなたのことを好きか，もっとお互いによく知り合えないか，彼女（彼）に聞く
今日の放課後，あなたは恋人とデートする予定です。あなたは学校でとても嫌なことがありました。あなたは恋人とデートしたいのですが，楽しめるかわかりません。あなたならどうしますか？	
選択肢	（1）何もなかったようにふるまって，恋人に気づかれないようにする
	（3）恋人に今日あったことを話して，残りのデートを楽しむようにする
	（2）デートを延期したいと恋人に伝える
	（4）何があったのかを恋人に伝え，それでも今日デートしたいか聞く

※（　　）の数字は得点を表す。

Table 4　SQとSADとDASの項目例

尺度	質問項目の例	回答選択肢
SQ (Rehm & Marston, 1968)	ただ話すために女性に電話をかける デートで女性とダンスする	「まったく不安にならない」～「とても不安になる」の7件法
SAD (Watson & Friend, 1969)	私は社交的にしなければならない状況を避けるようにしている 私は異性の誰かと話している時，たいてい落ち着いている 私はよく知らない人達の中にいる時，たいてい落ち着かない 私はパーティや会合で人に話しかけることは気にならない	「はい」or「いいえ」の2件法
DAS (Calvert, Moore, & Jensen, 1987)	パーティーで新しい異性に紹介される 男性と女性の友達グループで異性に話しかける デートしたい魅力的な異性と会話する デートで良い印象を与えようとする	「ほとんど不安にならない」～「とても不安になる」の7件法

避と社会的苦痛を測定する28項目から構成されている（Watson & Friend, 1969）。Dodge, Heimberg, Nyman & O'Brien（1987）は，異性不安の高い人と低い人の異性との相互作用を比較するために，SADの得点に基づき，実験参加者を高不安群と低不安群に分類し，異性との相互作用について2週間日記をつけるように求めた。その結果，異性不安の高い人は低い人よりも，異性との相互作用が少なく，自分の行動に対する自己評価と満足度が低かった。

DAS（the Dating Anxiety Survey）は，デート不安を測定する23項目から構成されており，受動的な接触やデートでの相互作用などの問題状況が扱われている（Calvert, Moore & Jensen, 1987）。

これらの自己評定尺度に関する研究では，異性不安やデート不安の高い青年を治療対象者と限定するために，相互作用能力や異性不安の高低群の分類基準として，それぞれ得点の分布の下位と上位3分の1から10分の1を設定している。したがって，相互作用能力が極端に低い，もしくは異性不安が極端に高い青年のみを，研究対象として扱っていたという特徴が見られる。

（3）自己評定尺度で扱われている問題状況

前述した自己評定尺度で扱われている問題状況について，筆者がKJ法（川喜田，1967）を援用してカテゴリーに分類した。その結果，自己評定尺度で扱われている問題状況は，出会いと挨拶（初対面の異性と接するなど），友人関係の開始（魅力的な異性に電話をかけるなど），友人関係（異性の友人と話すなど），デート（デートに誘うなど），交際関係（お互いの気持ちについて話すなど），性的状況（避妊について話し合うなど），仕事（異性と2人で仕事するなど），学校（異性の隣の席に座るなど），異性を含む集団（異性のグループと話すなど），ドラッグと酒（ドラッグや酒を勧められるなど），ハラスメント・性的虐待（性的関係の強要など）があげられた（Table 5）。

自己評定尺度で扱われている問題状況をまとめた結果，以下の3点が明らかになった。第1に，従来

Table 5　自己評定尺度で扱われている問題状況のまとめ

カテゴリー	問題状況の例	扱っている尺度	
出会いと挨拶	初めて誰かと会う	SHI	SAD
	面識のない魅力的な異性に話しかける	MAHC	DAS
友人関係の開始	よく知らない異性と話す	SHI	SAD
	魅力的な異性をダンスに誘う	SQ	DAS
	異性に電話する	MAHC	DAQ
友人関係	対人関係で悩みのある友達を助ける	SHI	
	異性の友人と重要な他者について話し合う	MAHC	
	友達に抱きしめられた時不快に感じる		
デート	デートに誘う	SHI	DAQ
	拒否される・拒否する	MAHC	
	おやすみのキスをする	DATE2	
	会話を続かせる	DAS	
交際関係	気持ちを話し合う	MAHC	
	関係について話す		
	嫉妬する		
	相手の親や友達に会う		
	別れる		
性的状況	性行為について話す	MAHC	
	性的接触を拒否する		
	避妊，妊娠について話し合う		
仕事	異性の上司を持つ	MAHC	
	異性と二人で仕事する		
	仕事でデートに誘われたが断りたい		
学校	異性の隣に座る	MAHC	
	異性の前で発表する	DAS	
	異性の級友と教室で口論する		
異性を含む集団	異性のグループと話す	MAHC	
	グループで唯一の異性となる	DAS	
ドラッグと酒	ドラッグや酒を勧められる	MAHC	
	ドラッグや酒の影響下で身体的に接触する		
ハラスメント・性的虐待	性的関係を強要する	MAHC	
	仕事での性的な発言やしぐさ		
	セクハラで訴えられる恐れ		

の自己評定尺度で多く扱われていた問題状況のカテゴリーは，出会いや友人関係の開始やデートなどの異性との関係構築における問題状況であり，関係の維持や終結における問題状況はMAHCで扱われていたのみであった。第2に，従来の自己評定尺度で扱われていた問題状況には，友人関係や仕事関係などの恋愛関係以外の問題状況も多く含まれており，恋愛関係に限定した問題状況を扱っている尺度は見られなかった。第3に，欧米の自己評定尺度で扱われていた問題状況では，ドラッグやハラスメントなどの問題状況が重視されていた。これらの問題状況は，欧米では重要な問題状況と捉えられていたが（Grover & Nangle, 2003），日本の恋愛における問題状況とは合致しないと考えられる。

（4）各尺度間の関連

Wallander, Conger, Mariotto, Curran & Farrell（1980）は，自己評定尺度による実験協力者の群分けの妥当性を評価するために，SQ，SAD，SHI，SAQの4つの尺度間の関連を調査した。その結果，尺度間の相関は低いが有意であること，実験協力者の群分けはそれぞれの尺度において異なるため，1つの尺度での群分けから他の尺度での群分けを予測することはできないことを明らかにした。

Faulstich, Jensen, Jones, Calvert & Buren（1985）

は，自己評定尺度の基準関連妥当性を検証するために，SQ，SHI，DAQの3つの尺度と行動スキルの他者評価との関連を調査した。その結果，DAQのデート場面以外の尺度において行動スキルの他者評価と有意な相関が見られ，SHIが行動スキルの他者評価と最も高い相関を示した。

Spitzberg & Cupach（1989）は，異性関係スキルと異性不安の測定尺度に関する研究をまとめた結果，異性不安と異性関係スキルの評価とは相関が高く，両者はほとんど区別がつかないことを指摘している。このように，異性関係スキルと異性不安は密接に関連している。

3－3．異性関係スキルと身体的魅力との関連

異性関係スキルと関連する要因の1つとして，身体的魅力が指摘されている（Arkowitz, 1977; Galassi & Galassi, 1979; Hansen et al., 1992）。

Calvert（1988）はレビュー論文において，異性との相互作用における身体的魅力の役割に関する研究をまとめた結果，身体的魅力によって，デート頻度や異性関係スキルが高い人と低い人とを区別できること，身体的魅力は女性にとって男性に選ばれるための最も重要な予測因となること，身体的魅力が異性関係スキルの評価に影響を及ぼすだけでなく，異性関係スキルも身体的魅力の評価を高めることの3点を指摘している。

実証研究では，Hope & Minsell（1994）が，社会的スキルの評価に対する身体的魅力の影響を検討している。同研究では，大学生64名に対して，身体的魅力と社会的スキルの異なる女性のサクラが映されたビデオを見て，サクラの身体的魅力と社会的スキルを評価するように求めた。その結果，サクラが同程度にスキルの高い行動をとった場合には，身体的魅力の高いサクラのほうが身体的魅力の低いサクラよりも社会的スキルがあると評価されたが，サクラが同程度にスキルの低い行動をとった場合には，サクラの身体的魅力は社会的スキルの評価に影響を与えていなかった。

4．異性関係スキル研究の問題点と今後の課題

異性関係スキルに関する従来の研究の問題点は，以下の4つにまとめられる。

第1の問題点として，関係の維持や終結に関するスキルを扱った研究が少ない点があげられる。前述したGalassi & Galassi（1979）による異性関係スキルの定義には，構築・維持・終結という3側面が含まれているが，従来の研究では，初対面時や極めて初期における関係構築スキルしか扱われていなかった。しかし，実際の恋愛においては，関係の維持・終結に関する問題も多く存在すると考えられる。したがって，異性関係スキルの全体像を捉えるためには，関係の維持・終結を含めて恋愛における様々な問題状況を幅広く捉えていくことが必要となる。

第2の問題点として，従来の研究は異性関係全般に不安や困難を持つ人々を研究対象としており，一般的な青年を研究対象としているものがほとんどない点があげられる。恋愛における問題状況を抱えているのは，異性不安やデート不安の尺度で高い得点を示すような異性関係全般に不安や困難を持つ青年だけではなく，一般的な青年も多くの問題状況を抱えている。したがって，異性関係スキルの全体像を捉えるためには，異性関係全般に不安や困難を持つ青年だけに研究対象を限定するのではなく，一般的な青年にも研究対象を広げる必要がある。

第3の問題点として，従来の研究では，恋愛関係と異性の友人関係が区別されていない点があげられる。恋愛関係には，告白や失恋など交際に伴う明確な区切りが存在することや，排他性などの異性の友人関係にはない特徴があるため（増田，1998; 菅原，2006），恋愛関係に特有の問題状況やスキルが存在すると考えられる。

第4の問題点として，日本と欧米の文化の違いによって，従来の研究で扱われてきた問題状況やスキルが必ずしも日本の恋愛にはあてはまらない点があげられる。日本における異性関係スキルの研究としては，堀毛（1994）や，豊田（2005）があげられる。しかし，堀毛（1994）ではデート場面のスキル，豊田（2005）では異性からの好意を得るためのスキルしか扱われておらず，恋愛に特化した具体的な問題状況やスキルを，関係の構築から終結に至るまで包括的に捉えた研究は見られない。したがって，日本に特有の問題状況やスキルを探索的に検討する必要がある。

引用文献

Arkowitz, H. (1977). Measurement and modification of minimal dating behavior. In M. Hersen, R. Eisler, & P. Miller (Eds.), *Progress in behavior modification*. Vol. 5. New York: Academic Press. pp.1-61.

Barlow, D.H., Abel, G.G., Blanchard, E.B., Bristow, A.R. & Young, L.D. (1977). A heterosocial skills behavior checklist for males. *Behavior Therapy*, 8, 229-239.

Calvert, J.D. (1988). Physical attractiveness: A review and reevaluation of its role in social skill research. *Behavioral Assessment*, **10**, 29-42.

Calvert, J.D, Moore, D. & Jensen, B.J. (1987). Psychometric evaluation of the dating anxiety survey: A self-report questionnaire for the assessment of dating anxiety in males and females. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, **9**, 341-350.

Chee, M. & Conger, J.C. (1989). The relationship between heterosocial and homosocial competence. *Journal of Clinical Psychology*, **45**, 214-222.

Christensen, A. & Arkowitz, H. (1974). Preliminary report on practice dating and feedback as treatment for college dating problems. *Journal of Counseling Psychology*, **21**, 92-95.

Conger, J.C. & Farrell, A.D. (1981). Behavioral components of heterosocial skills. *Behavior Therapy*, **12**, 41-55.

Dodge, C.S., Heimberg, R.G., Nyman, D. & O'Brien, G. (1987). Daily heterosocial interactions of high and low socially anxious college students: A diary study. *Behavior Therapy*, **18**, 90-96.

Faulstich, M.E., Jensen, B.J., Jones, G.N., Calvert, J.D. & Buren, D.J.V. (1985). Self-report inventories as predictors of men's heterosocial skill: A multiple regression analysis. *Psychological Reports*, **56**, 977-978.

Galassi, J.P. & Galassi, M.D. (1979). Modification of heterosocial skills deficits. In A. S. Bellack, & M. Hersen (Eds.), *Research and practice in social skill training*. New York: Plenum Press. pp.131-187.

Grover, R.L. & Nangle, D.W. (2003). Adolescent perceptions of problematic heterosocial situations: A focus group study. *Journal of Youth and Adolescence*, **32**, 129-139.

Grover, R.L., Nangle, D.W. & Zeff, K.R. (2005). The measure of adolescent heterosocial competence: Development and initial validation. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, **34**, 282-291.

Hansen, D.J., Christopher, J.S. & Nangle, D.W. (1992). Adolescent heterosocial interactions and dating. In V. B. VanHasselt, & M. Hersen (Eds.), *Handbook of social development: A lifespan perspective*. New York: Plenum Press. pp.371-394.

Hope, D.A. & Minsell, J.A. (1994). Global social skill ratings: Measures of social behavior or physical attractiveness? *Behaviour Research and Therapy*, **32**, 463-469.

堀毛一也（1989）．デート場面における社会的スキル　日本社会心理学会第30回大会発表論文集，139-140.

堀毛一也（1994）．恋愛関係の発達・崩壊と社会的スキル　実験社会心理学研究，**34**，116-128.

川喜田二郎（1967）．発想法　中公新書

Levenson, R.W. & Gottman, J.M. (1978). Toward the assessment of social competence. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **46**, 453-462.

増田匡裕（1998）．排他性　松井　豊（編）恋愛の心理学－データは恋愛をどこまで解明したか－　現代のエスプリ（至文堂）**368**，141-150.

中村雅彦（1991）．大学生の異性交際における愛情と関係評価の規定因に関する研究　実験社会心理学研究，**31**，132-146.

Nangle, D.W. & Hansen, D.J. (1998). Adolescent heterosocial competence revisited: implications of an expanded conceptualization for the prevention of high-risk sexual interactions. *Education and Treatment of Children*, **21**, 431-446.

Rehm, L.P. & Marston, A.R. (1968). Reduction of social anxiety through modification of self-reinforcement: An instigation therapy technique. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **32**, 565-574.

Spitzberg, B.H. & Cupach, W.R. (1989). *Handbook of interpersonal competence research*. New York: Springer.

菅原健介（2006）．恋愛における嫉妬と浮気の心理　斉藤　勇（編）イラストレート恋愛心理学－出会いから親密な関係へ－　誠信書房 pp. 94-103.

豊田弘司（2005）．大学生における異性関係スキル　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，**14**，5-10.

Twentyman, C.T. & McFall, R.M. (1975). Behavioral training of social skills in shy Males. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 384-395.

Wallander, J.L., Conger, A.J., Mariotto, M.J., Curran, J.P. & Farrell, A.D. (1980). Comparabil-

ity of selection instruments in studies of heterosexual- social problem behaviors. *Behavior Therapy,* **11**, 548-560.

Watson, D. & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **33**, 448-457.

（受稿3月23日：受理4月27日）